

方言生活の指導

——紀州方言に即いて——

藤 原 與 一

國民學校國民科國語の教則に、「日常ノ國語ヲ習得セシメ」とある。これに關しては、「醇正ナル國語」を目標とすべきことが説かれてゐる。「醇正ナル國語」は、「致へて標準語の範圍に止らぬ。標準語は音聲言語に限つていふことであり、醇正ナル國語は標準語を基礎とする文章語及び或程度の文章をも含む」(教則案説明要領)といふ。

國語教育の出發點或は場が、兒童のあり來つた日常の言語生活即ち何等かの方言生活にあることは明かであらう。醇正な國語の陶冶はこの一地方語體系で行はれる。こゝに右の標準語教育は大きな意味をもつ。もとより音聲言語と文字言語とを分離して了つてはならないが、今や「話し方」の教育も一分節として表面に出され、「文字言語としての國語教授を徹底する爲にも、其の地盤たる音聲言語としての國語が正しく豊かに培はれることが大切である」と説かれたりもして、教師兒童相互の既に有する言語生活の彫琢鍊成が要求されてゐるのであるから、標準語教育を考へることは緊要である。であれば各地の國民學校は、それぞれの郷土の實際言語生活をどう指導して行つたらよいの

標準語教育には標準が要る。理想・規範がなくては教育のしやうがない。一應さう言へる。然しその具體的な指示がないとすれば、我々自身で考へて之を進めて行く外はない。標準語はむしろ我々が育成してゆくものと考へるべきである。さういふお互の視ひは、醇化といふことでよい。醇化とは、くだいて言へば、兒童のことはを、少しでも、よりよいと思ふ方に向けて行くことである。結局は、教師自身で捌いて行くのである。すべては教師の責任に歸する。こゝに自覺の必要な所以があり、研究もまた必要になる。自覺の根本は、自己の醇化意識が國語の歴史的本質に基づいてゐるに相違ないことを、國語に生きる國民として反省し、確信するに至ることである。その上は、兒童のことはを、少しでも廣い言語社會の統一的動向に近附けることを念とすればよい。多數の人々を通ずる状態、多くの一般人の是認するらしい方向を慎重に見究めて行くのである。具體的な研究はこゝに始らざるを得ない。

例として、先頃行つてみた土地、紀州日高郡の山地、川上村をとると、著しい語法現象二段活用が先づ注意をひく。土地の教師は、これが今日世に一般的でないことをすぐに領解しよう。であれば、早速これの指導を問題にするのである。一つの眞剣な解決が次の仕事を産む。これを着々と進行させれば、後にはその全體が、期せずして體系的な措置となり得る。効果はそこに確かなのである。右の二段活用については、

○イマカライクラヒーンクルゾ。 今から行つたら日が暮れるよ。

○クサタゲナコトナラキケテアグルヨ。 變なやうな言葉なら聞かせてあげるよ。

などの言ひ方を、「クレル」「アゲル」と、世上に通りのよい發音にしようではないかとすゝめる方法をとる。基本の範例を與へて何ほどか反復させておけば、あの土地に一般的な二段活用は、明瞭な規則性を有してゐるだけに、却つてよく類推が利いて、改訂が容易に出来るかと思ふ。

二段活用に關聯して、他の變つた活用形に氣附くやうになれば幸である。

○ワシラワイケランサカ……。 わし等は行けないから……。

○イケジ(リ)スギタ。 生き過ぎた。

などがある。「イケジ」は「イケリ」の轉であることを、實際に現はれる二つの言ひ方から知れば、これと「イケラン」「ミラニヤ」(見なくては)などが相共に取り上げられる。轉音の氣附きからは、

○ミズヂヤンヨ一ニナツテノ一。 水が出ないやうになつてね。

の「ヂヤン」の形が問題になつてくるであらう。「ヤン」は恐らく「ラン」である。近畿の諸地方にある「アケヤントイデ」「アケラレヤン」(「明けるな」と禁止する言ひ方)などの「ヤン」も、元はこれであらう。「……ラン」「……ヤン」によつてア段音が親しまれてゐることに、

○ソレマデニワシナマイトモチ……。 それまでには死ぬまいと思つて……。

の「シナマイ」の形、即ち「マイ」がア段音に續くことには、亦關聯する性質が見出されて來よう。二段活用の改訂を起點として、色々の關係事項が指導できる。

次には、言表の終末にくる助詞が眼につき易い。際立つて著しいのが「ヨー」である。假りに教師が土地出身者だとしても、少しく心をはせるものには、すぐにこれが氣附かれよう。今までの單純な言語經驗を以てしても容易に氣附くことから始めればよい。そこに熱意を傾けることから出發すれば、道は順序に自ら開ける。「ヨー」には、

○アーンカヨー。 あゝさうかい。

○アレヨー、ワルカツタナー。 あれまあ、悪かつたわね。

○ニワヨー。 兄ちゃんはえ？

など、様々の用法があつて、一々注意を要する。「ヨー」の現れ方に、

○イテクラヨー。 行つてくるわね。

○ソガイニモカカリヤセナヨー。 そんなにもかゝりはしないさ。

など、「クラ」・「セナ」と、ア音に開いた言ひ方へ續ぐのがあつて、その頻用が耳につく。こゝに思ひ併されるのは、同じく頻用せられる。

○ソデスラー。 さうなんですよ。

の「ラー」の、ア音に開いた言ひ方である。この「ラー」は、「ライ」と言ふ南豫のこととは比べてみても、「ライ」へ「ワイ」であることがわかる。「ワイ」は、「わたし」に關係のある、特殊の效果をもつた、文末しめくゝりの用語で、自己の言説に念を押し、相手の注意を十分に引きつけようとする心意が本來あるらしい。「クラ」・「セナ」は「ク

ライ」・「セナイ」で、もとく「クルワイ」・「センワイ」ではなかつたか。これに「ワイ」の内在を推量するのだといほどのものであることと、それが強調の助詞「ヨ」に連ることに特徴をもつてゐることは、一系の事實として解釋すべきである。方言の指導には、このやうな微妙な點にまで同情ある考察を及ぼして行つて、そこに世上一般的な言ひ方を考へてやるのが大切である。方言生活に於て、獨自の感覺により、個性的に表現されたものを、論理學的な命題に基本を求めて整形することは、往々にして無理を伴ふ。具體的な方言指導として、常には東京語本位の言ひ方に換へ難い所以である。所詮、先に述べたやうな醇化を念とするに如くはない。

○

醇化は方言の排撃・否定ではなくて、育成とも言ふべき大乗的な肯定である。例へば風呂で垢を落すのにも似てゐる。人相應にきれいなのを好まぬものはあるまい。清潔になればそれでよいのであつて、元の汚れに歸るのは愚に過ぎる。方言生活の指導は、これと同じやうに、一元的な伸展を來するものでなくてはならない。この故に、醇化を圖るのは、力めてその対象と協調的に、その心理に即應してなすのをよしとする。家庭との連絡も、こゝに當然豫定されてゐるのである。

家庭との連絡は、兒童のことばのなまの環境を掴むことであると言つてよい。更には家庭乃至郷土の言語生活を醇化しようとする營みを含む。兒童への國語教育は、その屬する言語社會の善導と離れたものではない。

家庭に眼を向ければ、先づ成人の把持する、ことばの上の色々な傳統的意識が注意に上る。先の二段活用については、一老婆は、「シクマワリガトロインジンヤナイカナ」（舌が廻りとろいのぢやないかな？）と言ひ、つゞけて「ヤ

マガノコトバワイヤシナイヨノ。アツサリセン」(山家のことははいやしいわね、どうもあつさりしない)と語つた。或る三十歳臺の男子は、「オチルを言へばよいのをオツルと簡單に言つてのけてしまふのだ」と告げてくれた。彼は二段活用をぞんざいな言ひ方と見てゐる。これらには、舌がむしろよく廻ることを知らせ、低卑粗雑と言ふよりはむしろ由緒ある言ひ方であることを述べたい。この納得を地盤として、先の一段化の訓練の必要を説けば、親達はそれを、先生の有難いお骨折とばかりに、感謝を以て迎へるのである。すべて、祖父母すらも、よく、孫の將來際會する廣い世間へのためだと、はずみ心で諒解するまでに、仕向けるべきである。

○ オセワデオリマシタ。 お世話様でございました。

といふ言ひ方がある。家庭敬語或は村の敬語法と言ふべきものである。これを、家庭に向つては、「このまゝの氣持を以て、ゴザイマシタと言へば、一層世上への通りがよくなるのだ」と説いて、子供が言ふのをぎこちなく受取らぬやうに心掛けて貰ふことにとつとめ、さて兒童に向つては、同様な勸奨の態度に出ると共に、嚴にゴザイマシタをしつけてゆく。このやうな挨拶の言ひ方は、學校が兒童と家庭に働きかける面として、最初殊に有意義である。

○ タダイマデオリマシタ。 只今歸りました。

學校歸りが途中で筆者などにもかう言つて丁寧に挨拶した。それは見上げた敬虔な態度であつた。あれには一應「只今で御座いました」を言はせるのもよい。次いで「只今歸りました」への習熟轉移を望むのである。

○ オコシナイデ。 行つてらつしよいませ。

はよほど鄭重なことは遣ひとして存する。少しでも變つた言ひ方にはすぐ討究の欲を出して見るのである。すると、これは、「お越しなして」であることに氣附く。「……なして」の敬語法は朗かである。さてこれを言ふ中年以上の人には、その語法の分析と共に、これが兒童の習得すべきどういふ言ひ方と對應するかを説く。かうして、若いものの生活語陶冶に對し、消極的な隔絶感など催さぬ肯定の念を持たしめるのである。

○

要するに、家庭にも兒童にも、教師の指導が、彼等自身の氣持と妥協調和するものであることを感得せしめれば先づよい。その上は、教師が先頭に立つて、自己の標準語生活を實踐躬行してゆくことが第一に肝要なのである。

(昭和十六年四月二十五日)